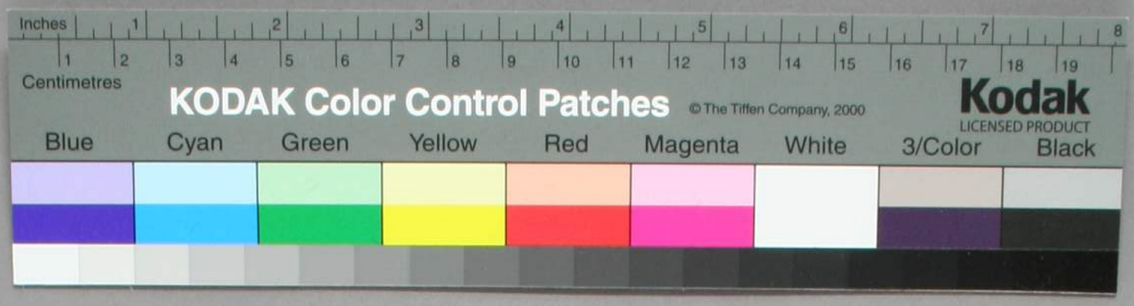

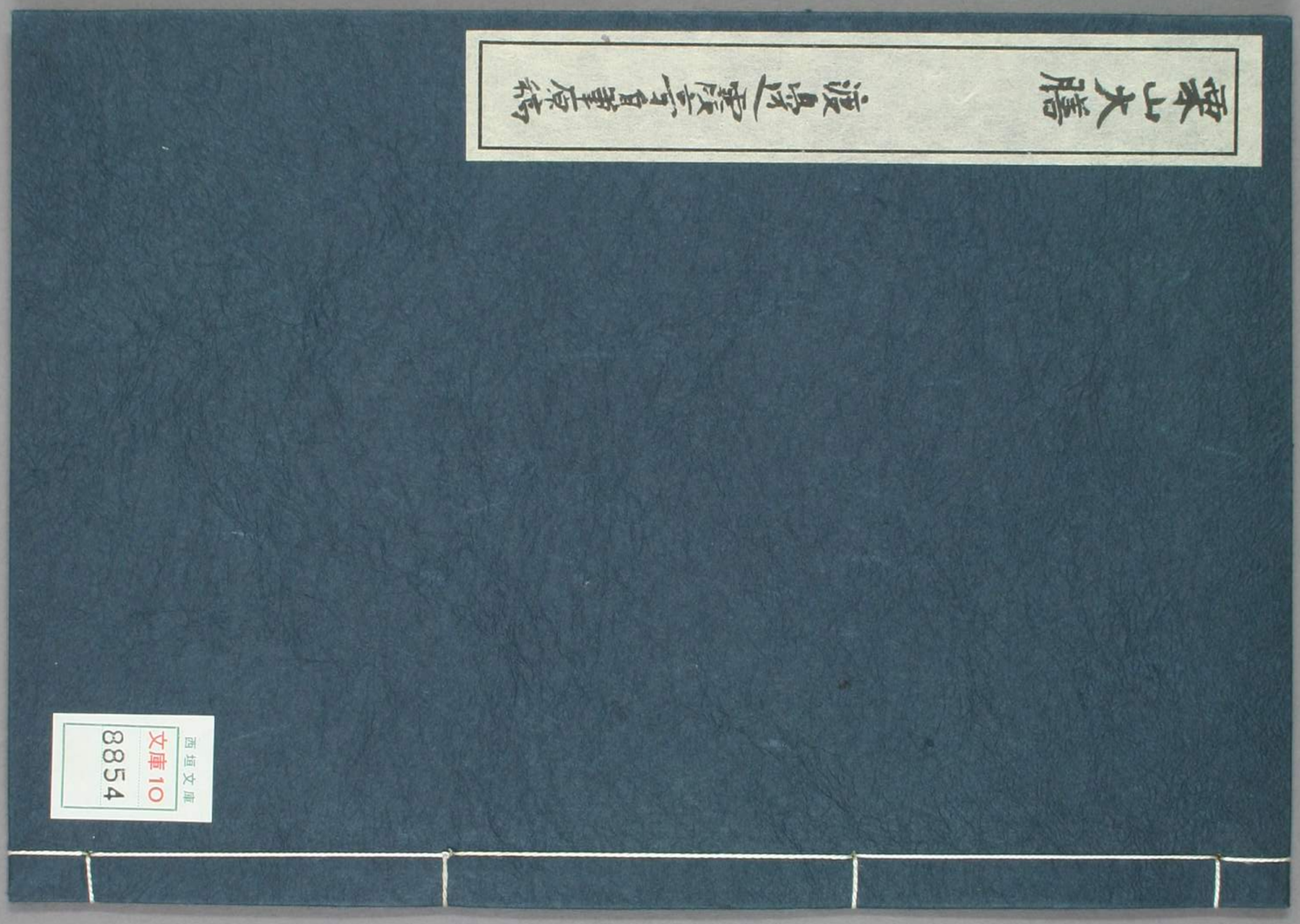

国会図書館
文庫10
8854

小說

宋山大賭

碧布垢陽居
渡邊霞亭

上

京都帝國大學圖書

（一ページ）

栗山大膳

（一ページ）

第一章　祖父

（一ページ）

播磨陽國

栗山家は村上源氏にして、思平親王十一代の孫播磨
伏原村郷と云へり。播磨國佐用の荘主村を住んで
陽國にて、毒虫の害を免れんと、さすがに村人の
初めて土佐へ移住して、武勇を
則方の孫にて、さすが武村人道田心の父
である

こゝより能登入道安能の二男なる、兵庫肥前守安能、
とゝふかありつた、是の則祝津侍は摂津守安能
て、父の前を俗名、自分は高家にて播磨国揖東郡
東山村を給つて、その子孫こゝに住居せり、そ
の子孫村ミヨ仮能の代る迄東山村の名を称して
東山と称せ、[illegible]こゝに、[illegible]
る、つ訓おのは東山氏は安能の支流、備中守利安か
ら利安迄東氏を称して播州揖東郡東山村を領し
、此後東山を改て氏とす、ところ、[illegible]
俗名分らぬか、今は東山家系譜を後つて置

く）

師節の後は栗山村の隠棲して、一向世に出づる事と為し功なかりしも、全く世を傾倒せしめる能はざりしが、未だ世間に知られざりし栗山善助なりしが、うるさく栗山善助を訪ねて、うるさく栗山善助と呼ん

だりしとある

栗山は栗山嵐水郷の弟子にて、紀州藩の家老にて、未だ二十歳の時、初めて、大志を抱いて、遠く遊学する時、親を待つて飛ばせ、その好学の地頭にあつたと思はれる、特異

上

安治郎は、まもなくあらゆる障害のあることを覚悟の際、一代の発達と仰いでも、活動を勇むは必人のおあるまい、と考え付き、永禄八年十五歳の夏、浦人の勢威を頼り、自ら孝喜の「孝喜は」と称んで、「孝喜の」と名乗るに先立ち、「孝喜の」と称して、城主小寺藤左衛門の前を勤めて、その活躍の勢力を繰り返し、[illegible]の家来となる方策、安治郎は、[illegible]の家来となる方策、栗山善助と名乗り、「活躍する先立ち」と称した。

と称した。

その仕方しかるも神妙であると

いうので、[illegible]

物他を侵れ・心ずまを通るーて、前夢又た夢通て
ゆめうつたるふ・孝喜甚く氣を入つて・遂る例仏く
ひし使ふこころをーて

外かり孝喜の組定遠を初・十七歳の時、初陣ちふ後
群の目物あ事り・大敵を仕止めて敵味方を驚るす
ーー驚きもあつた、けれども必ずは疑えて、之ふ後て
もよい

養助一代の苦志は・天正六年の摂津伊丹の城主
荒木摂津守村重が信長に背いた時のあつて、
黒田孝喜は兼て村重と親しい交りがあつたので、

上

いかるものして、殺生を思ひとゞまりて、早速
伊丹の城へ入つたを、村宮は父宗信の尚業で
あらゝと知うて、伊丹城内の一室へ押し籠めて、
そこで善助は同行の女里太吉夫婦と、心を合せ、
いかゝすべきと思ひ悩ましを善助は
[illegible]
[illegible]人南人の身を預かりて、城の内おと信ずふ
中、誠の為めの忠ひけられ、鉄牢で逃げ出さこと
もあり、まくの人数をもし向みらかえ事もあつて
刈、忠義の志は推けれ、村宮殺害、伊丹の城あ

四下

けや落ちやうとする時、それを消して安心して行くこのこと
入り、やつと孝夫と共に岩を置いて、決闘の間を
過ごしたのであつた

此時もし義卯の忠義、集りやせば、孝夫は伊丹の
城の秘密を告えて信長をあらうとさうすれば、姫
路の城へ帰つて行く。加藤の城の主、秋元の信をつれ
た

義卯の名は此節に喜くやつて来た